BCS
PRIZE-WINNING WORKS
BCS賞受賞作品探訪記
14

第三四回受賞作品（一九九三年）

# 酒田市営国体記念体育館 前編

一九九二年のべにばな国体に合わせて建設された酒田市営国体記念体育館。躍動するスポーツにふさわしい、明るく解放感のある競技空間と、軽快なデザインが追求された。前編では、この体育館が公園内に計画された経緯から、設計の意図と構造の構想までを紹介する。

文化施設とスポーツ施設を備えた飯森山公園に建つ酒田市営国体記念体育館。建物はメインアリーナとサブアリーナの二棟に分かれ、南側は多目的グラウンドに面している。

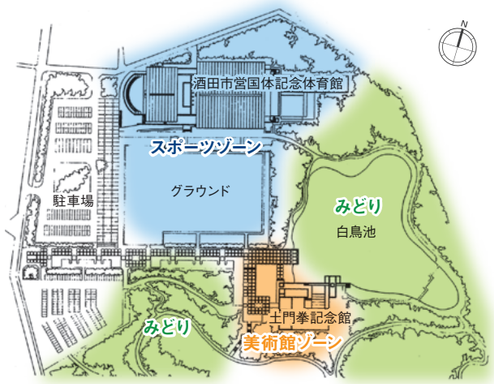
## 体育館と美術館が並び建つ飯森山公園の整備

最上川の河口にある酒田市。日本海の海運の拠点であり、江戸時代には「西の堺、東の酒田」と謳われるほど、港町として栄えていたという。現在も中心部には歴史的な建物が残り、往事の隆盛が偲ばれる。そうした歴史的な街並みをよそに、市街地から離れた最上川左岸には田園地帯が広がり、その一角の自然豊かな飯森山公園に、酒田市営国体記念体育館と土門拳記念館が並び建っている。どちらも建築家の谷口吉生氏が設計した建物である。お椀を伏せたような飯森山という自然の小山を中心に、両館が共存している様から、文武両道の市民の健やかな活動がうかがわれた。

飯森山公園の整備は、当時の酒田市長・相馬大作氏のある強い想いによりスタートした。一九七四年、酒田市は同市出身の写真家・土門拳氏から氏の全作品約七万点の寄贈を受けたのだ。その写真を展示するにふさわしい環境と建物を実現すべく、酒田市では、写真専門の美術館と体育館を備えた文化公園をつくる計画に取りかかった。

BCS賞受賞時の酒田市営国体記念体育館の外観。

文：伏見 唯　写真：山田新治郎



公園計画時のゾーニング図

それから四年後、相馬市長の想いを受け、計画に参画した土門氏の弟子である写真家の三木淳氏[※1]、と三堀家義氏[※2]から声を掛けられた谷口氏が、文化公園の敷地選定に加わった。谷口氏によると、現敷地のほかにもいくつか候補となる場所はあったが、水田が広がる開けた場所であること、近景の飯森山、遠景の鳥海山の美しさが決め手となり、市長の求めた文化公園にふさわしい環境として、飯森山公園が敷地に選ばれることになったという。

一九八三年に土門拳記念館が完成。その後、山形県が一九九二年の第四七回国民体育大会「べにばな国体」の開催地となると、国体開催に合わせて庄内空港、山形新幹線、高速道路の整備が県内各地で行われ、バレーボール会場となった酒田市でも新しい体育館の整備が飯森山公園にて急ピッチで進められたのである。

## 公園全体のバランスが考慮された体育館の設計

体育館は四面のバレーボールコートを有する巨大な施設であるため、飯森山公園の美しい風景を損なわないよう、周辺の環境との調和が求められた。設計を任された谷口氏がまず悩んだのは、記念館のそばに機能も規模もまったく違う体育館をつくることの困難さだったという。記念館は、周囲の柔らかく曲線的な自然と建築の鋭角で直線的な構成を際立てて対比させ、それがかえって自然と呼応した美しい風景を生み出していた。そこで氏は、機能と規模が異なる建物を違和感なく並び建たせるため、体育館と記念館を敢えて関係付けない計画とした。

まず、公園の全体計画を見直して、スポーツゾーンや美術館ゾーンと公園を明確に地区分けし、各ゾーン間が交錯しないように緩衝地帯となる植栽帯を設けた。谷口氏は、「建築を単体ではなくて周辺の一部として考えることは基本」という明確な意志を持っており、ここでは、限られた面積でも各ゾーンでの高度な利用が阻害されないように計画したそうだ。そのため、両館は近接しているものの、間に設けた植栽により視覚的に遮断されている。運動のための喚声が響き渡る場と、作品鑑賞のための静謐な場が分けられたのである。

また、建物の意匠も対比的につくられている。体育館は、土地柄から解放し、どこにでも建つ普遍的なものをつくろうとしたという。スポーツ施設にふさわしく、また敷地から遊離した佇まいを醸し出す軽快な意匠が目指された。屋根や壁は輝く金属板でつくられており、繊細な構造体とも相まって、軽やかな外観を呈している。

一方、記念館は、建物を飯森山の山裾に埋めたり、人工池に浮かぶように見せたりすることによって、土地に深く根付いた意匠としている。これは土門拳氏が酒田市の出身のためこの地と深く関連があるからだそうだ。花崗岩の外観からも、土地にどっしりと据わった重量感が感じられる。軽快な意匠と、重量感ある意匠。こうした徹底した意匠の対比は、異なる機能と規模が近接する不調和を、むしろ違和感なく並び建つ共存へと変換しているようだ。

酒田市営国体記念体育館の隣に建つ土門拳記念館。白鳥池という人工池の際で、飯森山の山裾に寄り添うように建てられている。

※1 土門拳記念館初代館長　※2 元日本映画テレビ技術協会理事長



## 織細かつ力強い構造体で空間をつくる

体育館という規模の大きな建物だけに、周囲の環境と調和し、軽快さを感じさせるためには、それに相応しい構造を選ぶ必要があったという。さらに国体に間に合わせるための工期や予算などの条件も重なり、様々な構造形式が検討されたそうだ。その結果、構造設計者の斎藤公男氏との協働により、張弦梁による屋根構造が採用された。張弦梁とは、鉄骨の大梁の下に構造用ケーブルを弓のように張り、張力を利用して大梁とケーブルが一体となって安定状態を保つ構造形式である。長い距離に梁が架け渡されても途中に柱を必要とせず、体育館のような大屋根を支えるのに適している。そして、躯体加重に対する負荷加重が大きいため鋼材量と製作費の低減につながり、且つレンズ型張弦梁とすることでフラットに近い形状の屋根をつくることができるといった点で、張弦梁は、国体記念体育館の様々な与条件に応えることができる最適な構造形式なのだろう。

天井にピンと張られた細い弦は、大きな屋根を支えることはもちろん、力の流れを視覚的に伝えながら軽快な印象を与えている。まるで、繊細かつ力強い動きが求められるスポーツそのもののようだ。まさに「思いっきり躍動」（べにばな国体のスローガン）するのにふさわしい空間だと感じた。

メインアリーナ。54mのスパンをレンズ型張弦梁とキャンチトラスからなる構造システムによって支えている。

**発注者より**

## 文化とスポーツ、そして自然と触れ合う飯森山公園

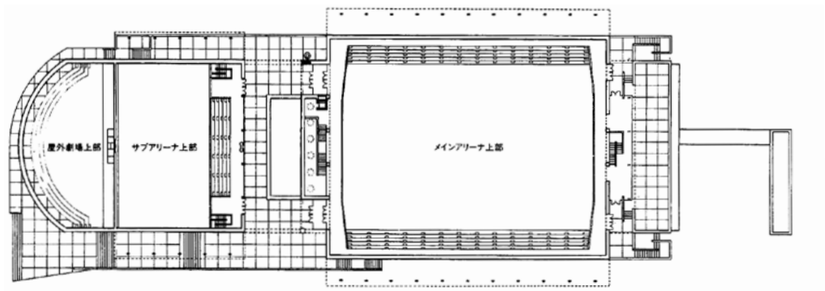
酒田市市民部文化スポーツ振興課施設係
**庄司英一** *Eichi Syouji*

私は文化スポーツ振興課という部署に所属し、国体記念体育館と土門拳記念館の管理をしています。両館がある飯森山公園は、今では市民および市外の方々にとってなくてはならない文化公園として、非常に重要な施設になったと感じています。土門拳記念館は、日本最初の写真専門美術館ということもあって市内外から多くの方の来館があります。国体記念体育館はどなたでも利用することができ、いろいろな競技ができるので、非常に高い稼働率で使われています。

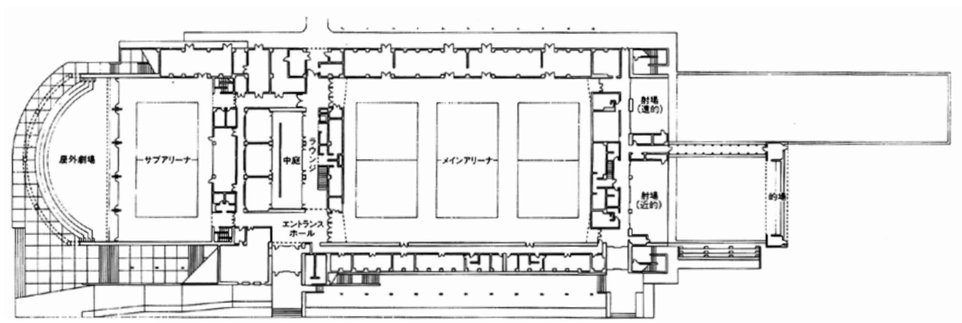
また、公園の植栽は四季型の整備がされているので、四季折々の自然と触れ合うことを目的に来られる方もいます。特に六～七月にはあじさい祭が催され、内外から多くの方が来園される名物となってきました。そして、周囲には一九九七年に酒田市美術館、二〇〇一年に東北公益文科大学が建ち、飯森山周辺は大きな文教地区として整備され、より魅力ある施設群になってきたと思います。

将来的には国体記念体育館を東北公益文科大学との連携を図るなど、施設間を跨いだ一体的な利用により、さらなる価値向上ができればと考えています。

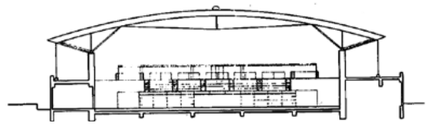
酒田は古くから日本海の港町であり、かつ庄内米を産する米所であったため、山居倉庫などの歴史遺産もたくさんありますが、飯森山地区も新たな酒田市の顔のひとつとして大切にしていきたいと思います。



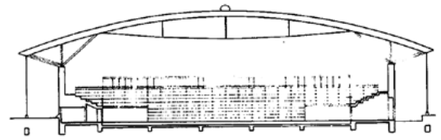

2階平面図



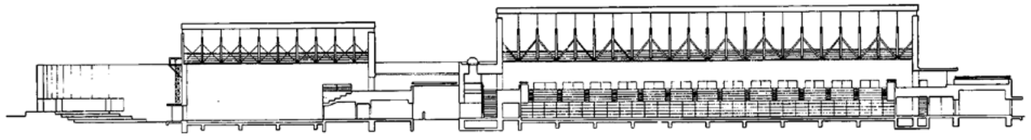

1階平面図



サブアリーナ断面図



メインアリーナ断面図



断面図

## 酒田市営国体記念体育館

JR「酒田駅」からバスで約15分

**工事概要**

**所 在 地**：山形県酒田市大字宮野浦字飯森山下296-8
**建 築 主**：酒田市、住宅・都市整備公団
**設 計 者**：谷口建築設計研究所
**施 工 者**：東急建設株式会社、株式会社加賀田組、大井建設株式会社
**竣　　工**：1991年6月30日
**敷地面積**：57,408.27㎡
**建築面積**：8,068.83㎡
**延床面積**：8,842.65㎡
**構造規模**：RC造、S造、地上2階